

受贈記念 安田コレクション

ピカソ
ふくやま美術館

2013年4月10日(水)ー6月23日(日) 会場:常設展示室

※月曜休館/ただし4月29日(月)、5月6日(月)は開館、5月7日(火)は休館

舞い降りた小さなピカソ

10年前に初めてこの小さなピカソを見たときの衝撃を今も忘れることができない。

それをパリのピカソ美術館であるとか、ピカソの回顧展で見るのであれば、それほどではなかったかもしれないが、岡山県井原市内の病院の一室という場所で、個人コレクションの1点として見たために、何とも言えぬ衝撃的な感覚を覚えてしまったのである。それは真贋に疑いの余地を与えぬ確かな噛みごたえのある強い作品であったが、所蔵者はゼルボスのレゾネ(C.Zervos, *Pablo Picasso: Oeuvre de 1923-1925*, Paris, 1957, vol.5, #243, p.115.)の確認も怠りはなかった。なぜここに1920年代の優品が秘蔵されていたのか、にわかに理解できなかった。

ピカソの小品《りんごとグラス、タバコの包み》(No.3)は、1924年に描かれた総合的キュビズムの作品で、モチーフは題名の通り「りんご」、「グラス」、「タバコの包み」なのだが、どのモチーフがどの形にあたるのか判然としない。りんごは、黄色に赤色を使い、グラスは黒い輪郭線で不完全に描かれ、タバコの包みは青の地色に、茶色、黒、白を使っている、完全な抽象画というわけでもなく、モチーフの形の名残を部分的にたどる半抽象というところである。

スペインに生まれたピカソがパリに出てきたのは1900年頃で、この地で哀愁に満ちた表現主義的な独自の作風を確立していった。世にいう「青の時代」「バラ色の時代」で、この時期を経て徐々に造形的なものを求めるようになる。そんななか1907年にセザンヌの回顧展に心動かれ、またアフリカ彫刻に関心を持つに至って、キュビズムの時代に突入していくことになる。このころアポリネールの紹介で、彼と同様セザンヌに強く惹かれていたジョルジュ・ブラックと知り合い、共同研究のように互いに刺激しあいながら、分析的キュビズムの作品を制作していった。1909年にオルタ・デ・エbro、1910年にカダスケの滞在の後、1911年のセリにおけるブラックとの共同制作により、風景や静物における対象を解体し、空間的ヴォリュームを排除し、複数の視点に基づいて面を細分化させた後に再構成を図る切り面のような画面を創りだしていった。それは、やがて難解な抽象絵画に近づいていくが、文字を導入したり、静物や楽器などの断片の正確な再現(トロンブ・ルイユ)を加えたりすることで現実との接触が保たれた。こうした究極的な追究は次の転換点を迎えることになる。それが総合的キュビズムの時代であり、1912年頃から1920年代まで断続的につづくことになる。ここでは対象は分析されず、具体的な内容をもつ大きな色面による構成がなされ、新聞紙の断片や壁紙などが糊貼り(パビエ・コレ、コラーージュ)された。人物など現実世界の像が明確に示されるとともに、色彩が復活して、情感豊かなものとなっていった。ギターやヴァイオリンなどの楽器のメロディーが奏でられるような背景のもとに、トランプをする人やパイプを持つ男など動きのある人物が描かれ、総合的キュビズムの作品は数多く制作されたのである。

《りんごとグラス、タバコの包み》が描かれた頃、つまり1923年から26年にかけての夏にピカソは、南フランスのジュアン=レ=パンで過ごすことが多く、ここで描かれた静物の背後には海や空が見えることが多いが、この小品の背景も青く、海のようにも見える。また、輝かしい色彩や曲線的なフォルムもこの時期



3.パブロ・ピカソ《りんごとグラス、タバコの包み》



2.ギュスターヴ・クールベ《波》



7.アドルフ・モンティセリ《庭の女性たち》



5. ジョルジュ・ルオー《ユビュ王》



12. モーリス・ユトリロ《雪のラバン・アジル》



13. ラウール・デュフィ《白鳥の池での休息》



10. アルペール・マルケ《停泊船、曇り空》



16. マリー・ローランサン《ターバンとマンティラとリボンをつけた3人の若い女性》

の特徴である。もう一度よく見ると、左下の渦巻きの形態はグラスの取っ手を、後方のハートのような形はりんごを、右画面の青地に黒い模様のものは、タバコの包みを示すとも考えられる。ただし、形態は明確でなく、具体的な対象と図像とが直接に結びつかないような描き方がなされている。全体的には海を背景にしたテーブルの上に静物が並んでいる光景を、青や白、茶色の色面で表すとともに、黒い線でリズム感を整えた作品なのである。

安田コレクション

この珠玉の小品の持ち主の安田博志さんは医師であったが、何よりも美術を愛したコレクターであり、日曜画家でもあった。安田さんは、1927年の岡山県総社市生まれで、小学、中学時代から絵画が好きだったという。学校の先生から絵の道に進むことを勧められたりしたが、戦争の時代であり、軍医を目指して岡山大学医学部に進学することにした。それ以来、外科医として、倉敷中央病院（倉敷市）をはじめとして、岡山大学医学部附属病院第一外科（岡山市）、小松島市民病院（徳島県）、端岡厚生病院（高松市）、中国中央病院（福山市）にて勤務してきた。そして1964年、ついに岡山県井原市に外科病院を開設し、昼夜の区別なく1日数人の手術をこなすほど忙しい日々を送ることになる。しかし「忙中閑あり」というように、安田さんは緊張を強いられる激務のなか、再び絵筆を持ち始める。旅行にほとんど出かけられないのは開業外科医の常であるが、その息抜き法としての絵画制作は安田さんの生きがいとなっていく。身体を心配して康子夫人が忠告するも、深夜の絵筆は止まることがなかったという。そして師を探し、福山市立女子短期大学で教えていた和田貢さんに手ほどきを受けるようになり、徐々に展覧会などにも出品するようになる。一方で、絵の参考になるとして美術品のコレクションも開始する。1960年代のことであったが以後、40数年にわたって続けることになる。

安田さんは、2001年に外科医院の第一線を退き、名誉院長となる。2003年には、自身のコレクションを、ふくやま美術館に移すことを決心し、調査を受け入れる。2005年には、中山巍や小磯良平など23点を寄附するとともに、一部作品を寄託した。しかし、安田さんは2012年2月、美しい絵画に囲まれながら84年の生涯を閉じられた。本人の遺志を継ぐ形で、夫人の康子さんは同年10月、福山市に77点の全作品を寄附したのである。

100点に及ぶ安田コレクションの特徴は、20世紀の美術をバランスよく収集した点にある。個人コレクションという性格上、比較的小品が多いが、「これは」と唸らせる玄人好みの逸品があり、コレクターの志の高さを物語らせている。主な作品を紹介してみたい。

西洋美術

まず西洋美術から見ていきたいが、目を引くのはクールベの《波》（No.2）である。リアリズムの画家クールベは、アルプスに近い故郷オルナンの山の風景をよく描いていたが、1859年頃からノルマンディ海岸の魅力に触れて興味を抱き、1865年頃から本格的に海の風景を描くようになる。1869年の《波》は、エトルタの海岸を訪れたときに、暗雲垂れ込める嵐のなかで荒れる怒涛を描いたものである。水平線には小さな帆船が一艘、さらに向こうに米粒ほどの小舟が描かれ、激しい人生の荒波に揉まれたクールベ自身の姿も見え隠れするようである。

同じくフランス19世紀の画家アドルフ・モンティセリ《庭の女性たち》（No.7）も不思議な絵画である。モチーフそのものは、ロ可可時代のヴァトーなどの貴婦人たちの庭園での遊びを描く雅宴画とよく似たものであるが、その描法は、全体に暗い色調ながら原色を用い、絵具を厚く盛りあげ、激しい筆致で描くもので、表現主義的ともいえるものである。ここには3人の貴婦人と1匹の猟犬が描かれ、静かな色調ながら激しい色彩の流動が感じられる。セザンヌは彼から多くを学んだようである。その他の19世紀の画家には、ディアズ・ド・ラ・ペーニャ、ウジェーヌ・カリエールなどがある。

20世紀になるとパリは芸術の都となるが、ここで活躍したピカソをはじめ、ブラック、マルケ、ルオーなどの作品が安田コレクションの中心である。その中から、主な作品を紹介しよう。

20世紀最大のキリスト教画家であるジョルジュ・ルオーの異色作に《ユビュ王》（No.5）がある。これは、フランスの作家アルフレッド・ジャリが創作した不条理劇『ユビュ王』の主人公を題材にしたもの。画商ヴォラールは、そのパロディとしてのアフリカ版を考案し、ルオーに依頼して版画集『ユビュおやじの再生』（1932年）を出版、その制作過程でさまざまなユビュの類作が生まれる。白人の政治家で、アフリカ植民地の支配者であるユビュ王の矛盾をグロテスクな姿に描いた、現代の人間像である。

芸術の都には、多くの国から芸術家たちが集まったが、パリ生まれの芸術家の活躍は意外と少ない。その例外が、エコール・ド・パリの画家ユトリロである。画家でモデルの母ヴァラドンの

私生児として生まれ、少年時代から酒におぼれる悲惨な生活を送ってきた。そんな彼の描くパリの街角のビルの壁面は、哀愁に満ち少し陰をもつ白に塗られている。1916年頃に描かれた《雪のラバン・アジル》(No.12)では、屋根や道も白く塗られている。このキャバレー「ラバン・アジル」は、モンマルトルの伝説的人物フレデ館さんの経営で、彼は昼間、魚の行商をし、夜な夜な自慢のギターをここで弾いていたという人物である。パリっ子ユトリロならではの視点であろう。

マルケもパリ生まれで、国立美術学校の時代から生涯を通してマティスと親しくしていた画家であり、強烈な色面構成で注目を集めた。その後、モロッコやアルジェリアなど中近東を旅行してから、風景画を多く手がけ、海や運河などの水面を巧みに描くようになる。1922年に描かれたこの《停泊船、曇り空》(No.10)も、アルジェの港の光景と考えられるもので、伸びやかな海の広がりや山の緩やかな連なりが他の追随を許さない「水の画家」といわれる所以であろう。

もうひとり、パリに生まれた女性画家がいる。マリー・ローランサンは、画塾でブラックと知り合い、ついでピカソやアポリネールなどと交流し、キュビズムの影響を受けるが、独自の人物画法を模索する。ピンクや灰色、青、白を基調にしたパステル・トーンの夢見るような乙女の姿を描き出すのは1920年代以降で、晩年にいたるまで作風に変化はなかった。《ターバンとマンティラとリボンをつけた3人の若い女性》(No.16)もローランサンの典型的なスタイルの水彩画である。

さらにパリらしい作品が、デュフィの《白鳥の池での休息》(No.13)という小さな作品である。デュフィは、ル・アーヴルの出身ながら、パリの国立美術学校で学んだ画家である。1905年のサロン・ドートンヌ展において、マティスの強烈な色彩に衝撃を受け、フォーヴィスムへと傾倒していった。デュフィは、難しい理論に走ることなく、明快な色彩と動きのある装飾的な描線により、その支持を広げていった。ここにも、青と緑の色彩対比と軽快な曲線や直線が踊り、躍動感にあふれている。

岡山県・広島県ゆかりの作家

安田コレクションの日本の近現代美術では、日本を代表する作家たち、そして岡山県・広島県ゆかりの作家たちの作品を集めていた。

岡山県関連で個人コレクションとして珍しいのは、児島虎次郎の《ベルギー、ガン市郊外》(No.31)であろう。これは児島が、大原孫三郎の援助を得て留学していたベルギーの Gent (ガン) において描かれた、1909年・1912年頃の作品と考えられる。1911年にパリのサロン・ド・ラ・ソシエテ・ナショナル・デ・ボザールに出品、初入選をするが、この頃、多様な筆致が混在した作品を描いている。ここにも、点描風の細かな筆致や、細長い筆致、そして大胆な筆致などが見られる。

岡山県津山市出身で、明治・大正・昭和と長期に渡り活躍した作家に赤松麟作がいる。東京美術学校で黒田清輝に師事し、1901年、第6回白馬会展に出品した写実的な《夜汽車》で白馬賞を受賞し、文展などで活躍した。1908年には大阪に画塾を開設し、後進の育成にも力を入れ、佐伯祐三などを輩出した。女性像を得意とし、「人物の赤松」と呼ばれた。この《踊子》(No.27)は、休息している3人のバレリーナを描いたもので、類作としては岡山県立美術館の《人物(少女)》(1920年代前半頃)などがある。

岡山県笠岡市出身の日本画家、小野竹喬の《春の芽》(No.62)は小品ながら、竹喬の脂の乗った時期の1957-58年頃の作と考えられる。竹喬は普段から自然と語り、親しんでいたが、この作品には、空に浮かぶ白い雲と、薄すすらと緑に色づきはじめた山並み、そして新芽が芽吹いてきた木の枝があり、日本のうつろう原初的な景色が描かれている。

岡山県・広島県関連では他に、中山巍、小林和作、齋藤真一、和田貢、福島瑞穂、高橋秀、金島桂華の作品が収蔵されている。

日本近現代の油彩画

日本近現代の油彩画として最初に紹介しなければならないのは、熊谷守一の2点であろう。熊谷は、東京美術学校に学び、第3回文展で褒状を受けた画家である。その後二科展を経て、二紀会の創立に加わり、4年後退会し無所属作家として自由な制作をつづけた。1931年の《女の顔》(No.28)は、第18回二科展に出品されたもので、フォーヴィスム時代の代表作。モデルは、有島生馬の弟子で詩人の馬淵美意子で、涼しげな顔に隠された秘めた情熱を描き出したものである。この作品は当初は有島生馬の所蔵となり、その後、山本發次郎コレクションを経て、安田コレクションに入ったものである。1962年の《白い臥裸婦》(No.29)は、晩年の形と色を単純化した色面構成による、素朴で独特な様式となった時期の作品。熊谷は、「景色を見ているでしょう。そうすると、それが裸体になって見えるのです。つまり景色を見ていて裸体が描けるんです。同じようにまた裸体を見ていて、景色が描けるのです」(『心』平凡社、1955年6月号)という独自の見解を示している。



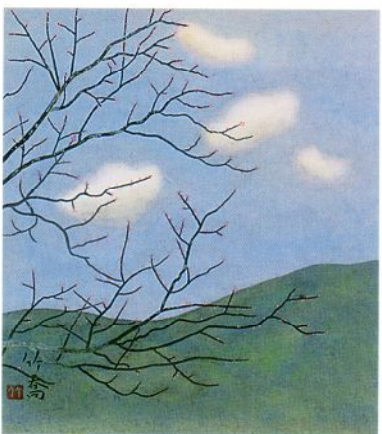
1. 安田博志《手術室》



31. 児島虎次郎《ベルギー、ガン市郊外》



27. 赤松麟作《踊子》



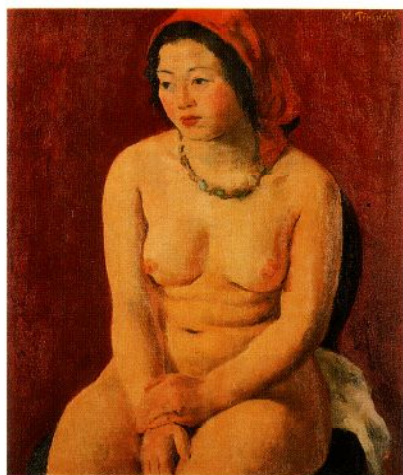
62. 小野竹喬《春の芽》



63.岸田劉生《秋閑》



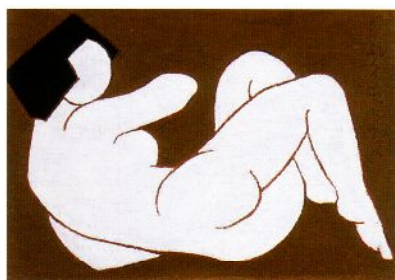
40.梅原龍三郎《牡丹》



36.寺内萬治郎《裸婦》



42.鈴木信太郎《ばら》



29.熊谷守一《白い臥裸婦》



28.熊谷守一《女の顔》

興味深いエピソードは、岸田劉生《秋閑》(No.63)にもある。劉生が、鎌倉に住んでいた昭和初年の、坪内逍遙との意外な交流を示す作品である。逍遙の居宅が熱海にあり、そこに柿の老木2本があったことから「双柿舎」(会津ハ一の命名)と呼ばれていた。劉生はそれにちなんで、柿の実の絵を描き、何かの機会に逍遙に贈ったというのである。この作品には、坪内逍遙の養子で早稲田大学教授であった、坪内士行の書状が添えられていて、その時の事情に触れている。

色彩豊かな静物画も何点があるが、なかでも目を引くのは、梅原龍三郎の《牡丹》(No.40)と鈴木信太郎の《ばら》(No.42)である。梅原龍三郎の《牡丹》は、油彩で描かれたもので、1950年代後半から1960年代にかけての作と考えられる。梅原は、日本的な油彩画表現を求めて、岩絵具を混入させたり、デトランプ(テンペラ)という技法を使うなどしていた。この油彩画においても、ほかしやにじみができるよう日本画的な表現方法を取り入れて、日本の湿度に適合した油彩画表現を試みている。鈴木信太郎の《ばら》は、1970年代から1980年代にかけての作と考えられる。鈴木は、数多くの薔薇や花の絵を手掛けるが、華やかな壺と鮮やかなテーブルクロスを入れる場合も多い。ここでは、薔薇の花と果物、そしてクロスの花柄が色彩のシンフォニーを奏でている。

安田コレクションには多くの人物画があり、そのなか存在感をもつのが、寺内萬治郎の《裸婦》(No.36)である。寺内は「デッサンの神様」と呼ばれるほどに写実力を磨き、量感のある重厚な裸婦像を数多く描いている。ここには、梅原が愛したポンペイ遺跡の壁画の赤を引用するように、赤色の背景を描き、肌色を際立たせている印象的な裸婦である。

以上、安田コレクションの一部を紹介してきたが、最後に安田さん自身の油彩画《手術室》(No.1)を紹介したい。これは外科医の仕事場である手術室を描いたものである。一般の人間が抱く非日常的なイメージとは違って、日常的な風景として淡泊に描かれているのが印象的である。疲れ高ぶった神経を癒すため、愛するコレクションが並び部屋のなかで、深夜にひとり楽しそうに絵筆を走らせていた安田さんの姿が目には浮かぶようである。

(学芸課長 谷藤史彦)

【編集後記】

2013年度の特別展と所蔵品展のラインナップがでそろいました。春は、「ウルトラマン創世紀展」とこの「安田コレクション」で、幅広い年代層に親しんでいただける取り合わせです。夏は、「黄金期の浮世絵 歌麿とその時代」と「吉田卓と二科会の画家たち」という、江戸期の浮世絵と大正・昭和期の油彩画という対照的な取り合わせです。秋は、「観じる民藝」と「福田恵一と森戸果香」で、民芸の個人コレクターのコレクションと昭和の日本画家による歴史画という取り合わせです。また、冬は、「佐野洋子 絵本の軌跡」と「再発見!小林徳三郎」で、現代に活躍したユーモラスな絵本作家と、近代美術における異色の画家との取り合わせです。本年度は、とくに所蔵品展の企画に力を注いでいます。これまでに寄贈された作品をより深く研究し、整理して、分かりやすい形でご紹介するよう心がけています。特別展と所蔵品展合わせて8本の企画を楽しんで観ていただけたと思います。

(学芸課長 谷藤史彦)

受贈記念 安田コレクション

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行 (cm)
1	安田博志 (1927-2012)	手塚室	1970	油彩,カンヴァス	116.7×90.9
2	ギュスターヴ・クールベ (1819-1877)	波	1869	油彩,カンヴァス	34.5×51.8
3	パブロ・ピカソ (1881-1973)	りんごとグラス、タバコの包み	1924	油彩,カンヴァス	16.0×22.0
4	パブロ・ピカソ	27/7/68/IV	1968	メゾチント,紙	31.5×39.2
5	ジョルジュ・ルオー (1871-1958)	ユピュ王	1939頃	油彩,カンヴァス	45.5×68.5
6	ディアズ・ド・ラ・ペーニャ (1807-1876)	身繕いをするヴィーナス		油彩,カンヴァス	48.0×39.0
7	アドルフ・モンティセリ (1824-1886)	庭の女性たち		油彩,板	26.5×50.0
8	レオン・オーギュスタン・レルミット (1844-1925)	昼食の支度		パステル,紙	33.5×41.5
9	ウジェーヌ・カリエール (1849-1906)	腕組みの座る女		油彩,カンヴァス	46.0×38.0
10	アルベール・マルケ (1875-1947)	停泊船、曇り空	1922	油彩,カンヴァス	38.4×46.0
11	モーリス・ド・ヴラマンク (1876-1958)	雪の風景		油彩,カンヴァス	45.0×55.0
12	モーリス・ユトリロ (1883-1955)	雪のラバン・アジル	1916頃	油彩,カンヴァス	50.1×62.5
13	ラウル・デュフィ (1877-1953)	白鳥の池での休息		油彩,カンヴァス	15.8×30.5
14	ジョルジュ・ブラック (1882-1963)	静物		油彩,板	5.0×30.7
15	ジョルジュ・ブラック	ギリシャ風の横顔	1960	リトグラフ,紙	33.5×24.5
16	マリー・ローランサン (1885-1956)	ターバンとマンティラとリボンをつけた3人の若い女性	1928頃	水彩,紙	35.0×44.0
17	アンリ・マティス (1869-1954)	女性の顔		リトグラフ,紙	34.0×25.0
18	マルク・シャガール (1889-1985)	青い村	1981	油彩,カンヴァス	24.0×35.0
19	ベルナール・ビュッフェ (1928-1999)	花束	1957	油彩,カンヴァス	65.0×55.0
20	ベルナール・ビュッフェ	マールの海岸	1964	鉛筆,紙	47.0×61.0
21	アンドレ・コタボ (1922-2012)	風景画		油彩,カンヴァス	71.0×53.0
22	ジル・ゴリチ (1939-)	風景		油彩,カンヴァス	26.0×45.0
23	ジョアン・ミロ (1893-1983)	鋭い旋律 NO.1		リトグラフ,紙	29.0×22.5
24	ジョアン・ミロ	太陽礼賛	1975	エッチング,紙	35.7×50.0
25	エミリオ・グレコ (1913-1995)	裸婦	1970	ペン,紙	50.5×69.0
26	エミリオ・グレコ	うすくまる女 No.4	1973	ブロンズ	70.0×45.0×34.0
27	赤松麟作 (1878-1953)	踊子		油彩,カンヴァス	60.3×49.5
28	熊谷守一 (1880-1977)	女の顔	1931	油彩,板	41.0×32.0
29	熊谷守一	白い臥裸婦	1962	油彩,板	15.6×22.7
30	熊谷守一	裸婦		パステル,紙	38.0×26.0
31	児島虎次郎 (1881-1929)	ベルギー、ガン市郊外	1909-12	油彩,カンヴァス	64.5×80.5
32	藤田嗣治 (1886-1968)	マドレーヌの横顔		ペン,水彩,紙	28.5×21.0
33	安井曾太郎 (1888-1955)	裸婦		鉛筆,紙	27.5×18.0
34	国吉康雄 (1889-1953)	腰にスカーフを巻いた娘	1930代	鉛筆,クレヨン,紙	35.2×43.0
35	中山巍 (1893-1978)	少女	1951	油彩,カンヴァス	63.5×52.0
36	寺内萬治郎 (1890-1964)	裸婦		油彩,カンヴァス	52.0×45.5
37	福沢一郎 (1898-1992)	ヘラクレスと牛		油彩,カンヴァス	31.0×40.0
38	須田国太郎 (1891-1961)	桃		油彩,板	23.5×32.5
39	東郷青児 (1897-1978)	二つの塔		油彩,カンヴァス	27.2×22.0
40	梅原龍三郎 (1888-1986)	牡丹		油彩,カンヴァス	60.0×50.0
41	中川一政 (1893-1991)	椿蜜柑		油彩,カンヴァス	53.0×45.5
42	鈴木信太郎 (1895-1989)	ばら		油彩,カンヴァス	60.0×49.0
43	小林和作 (1888-1974)	室戸	1952頃	水彩,紙	18.5×46.0
44	小林和作	山湖の秋		油彩,カンヴァス	31.8×41.0
45	小林和作	石槌山中の春		油彩,カンヴァス	45.2×37.3
46	斎藤真一 (1922-1994)	おてい瞽女とおきな瞽女-越後瞽女日記より		油彩,板	32.5×23.5
47	斎藤真一	赫い陽 越後瞽女日記	1977頃	油彩,板	24.4×33.4
48	脇田和 (1908-2005)	鳥の伝言	1986	油彩,カンヴァス	72.0×58.0
49	國領経郎 (1919-1999)	浜辺の二人の女		油彩,カンヴァス	51.5×44.5
50	和田貢 (1927-)	舞台へ向かうダンサー	1998	油彩,カンヴァス	33.5×24.2
51	福島瑞穂 (1936-)	真珠の飾り		油彩,カンヴァス	17.5×13.0
52	絹谷幸二 (1943-)	女性	1985頃	フレスコ,カンヴァス	71.0×90.0
53	絹谷幸二	薔薇		フレスコ,カンヴァス	44.0×52.0
54	小林一彦 (1947-)	JUMPING	1991	アクリル,カンヴァス	44.0×52.0
55	池田満寿夫 (1934-1997)	黒と赤	1986	リトグラフ,紙	60.5×50.0
56	高橋秀 (1930-)	発芽 一赤一	1996	アクリル,カンヴァス	26.5×28.0
57	高橋秀	閃光	2003	アクリル,金箔,カンヴァス	60.0×90.0
58	狩野尚信 (1607-1650)	瀧燕図		紙本墨画淡彩	112.2×22.0
59	橋本関雪 (1883-1945)	暖翠		絹本着色	42.0×57.0

*は寄託作品

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)
60	橋本関雪	夏山観瀑		絹本着色	131.0×27.5
61	小野竹喬 (1889-1979)	柳蔭	1918	絹本着色	118.0×39.5
62	小野竹喬	春の芽		絹本着彩	27.0×23.0
63	岸田劉生 (1891-1929)	秋閑		紙本淡彩	36.0×23.0
64	金島桂華 (1892-1974)	椿		紙本着色	118.0×31.5
65	棟方志功 (1903-1975)	天下第秀頂図		紙本着色	34.6×39.1
66	棟方志功	鐘溪頭 彼岸の柵(全24冊の内の24番目)	1945/1969	木版,彩色	51.0×39.6
67	堂本印象 (1891-1975)	風薫るころ		紙本着色	43.5×49.7
68	上村松篁 (1902-2001)	竹鶴		紙本着色	30.0×49.5
69	安居由紀夫 (1950-)	臍		紙本着色	53.0×41.0
70	清水比庵 (1883-1975)	富士(赤い雲の富士)	1974頃	紙本墨画淡彩	36.0×47.5
71	清水比庵	富士	1967頃	紙本墨画淡彩	34.0×52.0
72	関野準一郎 (1914-1988)	函館		木版,紙	32.0×46.0
73	関野準一郎	日高		木版,紙	32.5×46.0
74	金重慄 (1945-)	備前鍔口花入	1996頃	陶	24.8×14.0×14.0
75	朝倉響子 (1925-)	ジュリー	1985	ブロンズ	54.0

第3室：ヨーロッパ美術

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横×奥行(cm)
76	モーリス・ユトリロ (1883-1955)	酪農場	1916	油彩,板	51.0×65.0
77	アンドレ・ドラク (1880-1954)	婦人像	1925	油彩,カンヴァス	61.0×73.8
78	パブロ・ピカソ (1881-1973)	近衛騎兵(17,18世紀の近衛騎兵)	1968	油彩,パネル	81.0×60.0 *
79	アルトゥーロ・マルティネーニ (1889-1947)	牛	1943/89	ブロンズ	28.5×34.0×13.0
80	フィリッポ・パリッツィ (1818-1899)	ザンポーニャ奏者	1862	油彩,カンヴァス	70.0×60.0
81	ジュゼッペ・パリッツィ (1812-1888)	羊飼いと羊の群れの風景	1870頃	油彩,カンヴァス	49.0×72.0
82	ジョヴァンニ・セガンティーニ (1858-1899)	婦人像	1883-84	油彩,カンヴァス	120.0×87.0
83	メダルド・ロッソ (1858-1928)	門番の女性	1883	ワックス,石膏	37.0×30.0×17.0
84	ハンス・リヒター (1888-1976)	ベルナスコーニ氏像	1917	油彩,カンヴァス	60.0×47.0
85	オットー・グートフロインド (1889-1927)	ヴィキ(立体主義的頭部)	1911-13	ブロンズ	33.1×25.0×25.0
86	クルト・シュヴィッターズ (1887-1948)	抽象19(ヴェールを脱ぐ)	1918	油彩,厚紙	69.5×49.8
87	ウンベルト・ボッチォーニ (1882-1916)	カフェの男の習作	1914	油彩,カンヴァス	58.0×46.0
88	ジャコモ・バッラ (1871-1958)	輪を持つ女の子	1915	油彩,カンヴァス	51.0×60.5
89	ジョゼッペ・カボグロッシ (1900-1972)	Sup.671	1958	グワッシュ,紙	71.0×50.5
90	ソーニャ・ドローネー (1885-1979)	色彩のリズム	1953	油彩,カンヴァス	100.0×220.0
91	サンドロ・キア (1946-)	少女	1981	油彩,パステル,紙,カンヴァス	194.0×150.0
92	ピエロ・マンゾーニ (1933-1963)	アクローム	1961	小石,カンヴァス	70.0×50.0
93	ルチオ・フォンタナ (1899-1968)	空間概念—銀のヴェネツィア	1961	油彩,ガラス,カンヴァス	60.0×50.0
94	ベリクレ・ファッツィーニ (1913-1987)	風(踊り子)	1956-60	ブロンズ	139.0×80.0×90.0

和室展示 松本コレクション「春の茶道具」

No.	作家名(生没年)	作品名	制作年	材質技法	縦×横(cm)
95	玉舟宗瑠 (1600-1668)	諸悪莫作衆善奉行 一行		紙本墨書	130.5×24.5 *
96		織部鳥摘香合		陶	高6.6 口径3.8 *
97		薩摩焼茶入 銘 残雪		陶	高10.0 胴径5.5 *
98	一入(樂家4代) (1640-1696)	黒樂茶碗 銘 髻		陶	高8.2 口径9.3~9.5 *
99	道入(樂家3代 通称 ノリ) (1599-1656)	赤樂茶碗 銘 紫翠		陶	高7.8 口径13.5 *